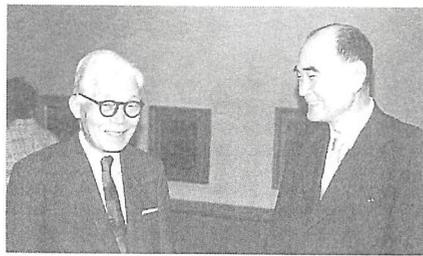


宗像久敬ともう一つの終戦工作(上)

松浦正孝

宗像久敬(写真右)と、南原繁(写真左)①。一九六九年五月下旬、銀座七丁目の資生堂ギャラリーで、二人の同級生は再会した。宗像が亡くなる約一年前のことである。宗像が初めて油絵の個展を開き、招待状を南原に出したのであった②。



二人は、その七〇年前の九月、四日違いで生まれた。宗像家は福岡の宗像一族の出であったが、その後岡山に移り、宗像の生まれたのは湯島であった。一方、南原は香川に生まれ、一八八〇年その地で育った。二人の家庭の事情は、それぞれに複雑であった。母の慈愛を受けて育った二人は、猛烈勉強してそれぞれ六高と一高を出、東京帝国大学法科大学に入った。そこで出会った二人は、南原の言葉に

よれば「馬車馬みたいに」競い合って勉強し、政治学科の卒業に際して、異例ながら二人で銀時計を受けた。同点首席だったためである。南原は後年、「六高からきた柔道の強い宗像久敬君、これがよくできた」と語っている。その後、宗像が日本銀行へ、南原が六年余りの内務省勤務を経て東京帝国大学法学部へと、二人は別々の道を歩み始め③、両者の軌跡は晩年の再会まで、大きく交わることがなかった。

しかし、両者の軌跡は、一度だけ、一つの政治工作をめぐって近づいた。一九四五年における終戦工作が、それである。

日本の敗色濃厚となった四五年の三月、南原は東京帝国大学の法学部長に就任した。法学部長として何をなすべきか考えた南原は、かつて日露開戦を説いた七博士(戸水寛人・小野塚喜平次・富井政章・金井延・寺尾亨・中村進午・高橋作衛)の例に倣い、高木八尺・田中耕太郎・末延三次・我妻栄・岡義武・鈴木竹雄の六教授とはかつて、終戦工作に乗り出した。彼らは、学問的に情報を収集・分析した上で、ドイツ降伏の時期を捉え

て、ソ連ではなくアメリカを相手とする終戦工作に入るべきことを、近衛文麿・若槻礼次郎らの重臣や木戸幸一内大臣、東郷茂徳外務大臣、宇垣一成陸軍大将、高木惣吉海軍少将らに秘密裡に働きかけた。彼らの考えた終戦工作の概要は、天皇制の護持のみを条件とする「無条件」降伏とし、徹底抗戦論の強い陸軍を比較的柔軟な海軍に説得させ、昭和天皇の詔勅により終戦させる、終戦後天皇は退位する、というものであった。

当時、終戦工作をめぐっては、対戦国たる米英と直接行うべきであるという主張と、中立国であるソ連を通じて行うべきであるという主張とがあり、この他交戦国たる中国や中立国のスイス・スウェーデン・ヴァチカン等を通じて行うべしとの議論があつて、その模索も行われていた。陸軍では梅津参謀総長らが、戦後米ソ両大國が対立するであろうことを重視して、ソ連を利用し連合国側から有利な条件での和平を引き出すことを強く主張した。これに対して、南原らの主張は、できれば直接米英と、それが無理なら第三國を通じて米國と交渉すべきであり、

ソ連を通じた終戦工作は避けるべきだ、というものであった。

その後政府は、周知のようにソ連を通じた和平工作に望みをつないだ。しかし、すでに対日参戦を決定していたソ連はこれに応えず、日本政府が時間を浪費するうちに、アメリカによる原爆の投下とソ連参戦とがなされ、ついに日本は無条件降伏を余儀なくされた。南原は戦後「結局、私らのしたことは効果なかった。主観的な自己満足にすぎなかった」と回顧している④。

しかし、南原らの終戦工作は、木戸内大臣や重臣等に対して、そして彼らを通じて天皇に対して、戦争の見通しやアメリカ側の情報等について専門家の立場から重要な情報を提供し、天皇を含む国家上層部の終戦への意思形成に影響を与えた。情報提供によって、終戦実現への一つの役割を果たしたものと評価することができよう。南原と高木は、五月七日と六月一日に木戸内大臣を訪れて終戦につき意見を述べているが、木戸はこれらの情報に基づき、六月八日に「時局收拾対策試案」を起草し、翌日天皇にこれを進言して、その意思を打診した。木戸が

11月刊 比較文明12

- 《特集 文明と価値》
比較文明学会編 A5 ¥2575
■バックナンバー揃います
1《特集 比較文明の地帯》
2《特集 日本文明の解明》
3《特集 科学文明と宗教文明》
4《特集 文明の交流と動態》
5《特集 文明と都市》
6《特集 世界文明と地域文化》
7《特集 文明と国家》
8《特集 文明システム》
9《特集 21世紀への文明変動》
10《特集 文明の共存》
11《特集 文明と海》

好評発売中 鯨網の村の四〇〇年

一能登灘浦の社会学的研究一
中野卓 昭和27年九学会連合天
の能登総合調査以来40年余、天
正以来の漁業史料と世帯別の悉
皆調査を背景に、江戸期・明治
大正期・戦後期の技術・組織・
社会を精査して画く日本海漁村
の風景 A5 387頁 ¥7828

第二次世界大戦後 戦争全史

張聿法・余超・余超編／浦野起央・
劉庭朝訳 2度の大战をへてな
お戦争は絶えない。戦争の中
から出現した中国が全力で集めた
194の戦争誌 A5 686頁 ¥1万300

今年度 今 和次郎賞受賞 大文字の都市人類学的研究

一左大文字を中心に一
和崎春日 京都の大文字を調
査すること23年、個と連帯の都
市生活誌 A5 585頁 ¥13,390
(刀水歴史全書42)

仙台漂民とレザノフ

一幕末日露交渉史の側面No.2-
木崎良平 若宮九六人の数奇
な運命と日露交渉の真情。日露
双方の史料を駆使して画く新研
究 四六上製 261頁 ¥2884

刀水書房

東京都千代田区西神田2-4-1
Tel.03-3261-6190, Fax.3261-2234

作成した試案は、もはや戦局收拾のための決断をなすべき時期であるとして、国体護持のために、天皇の裁断により占領地の放棄や軍備解除を含む和平交渉へと入るべきことを、具申するものであった。木戸の試案が唯一南原らの工作与異なっていたのは、終戦工作を米英とはなく中立国であるソ連を仲介として行うべし、としている点である。南原らの工作は、最も重要な点においてのみ、陸軍等の強い影響を受けた国家上層部の終戦方策を覆すのに失敗したのである。

南原らの工作が情報提供という点で日本の終戦工作の重要な一環を為していたとすれば、宗像が終戦工作で果たした役割もまた重要であった。彼は、天皇から一時遮断されていた、近衛文鷹を中心とする重臣層の終戦工作促進の意思を、木戸内大臣を通じて再び天皇にスイッチする役目を果たしたのである。當時木戸は、内閣ないし軍部以外の意思は、皇族や重臣のそれであつても、天皇に取り次がない方針であつた。対米英開戦後、近衛元首相すら儀式的なものを除けば、一度も天皇に拝謁する機会がなかったという。このため、終戦工作を焦る重臣グループからは木戸の更迭も主張され、両者の確執は深まっていた。四五年一月初旬に米軍がルソン島上陸作戦を進めている報を知り、天皇が重臣等の意向を聞く必要があるのではないかと、木戸に問うた際にも、木戸はまず陸海軍総長、そして関係閣僚の意見を聞くべきであると述べてこれに慎重な態度を示した。

で修善寺に疎開しており、池田や木戸とも頻りに接触していた。一月二七日の木戸の日記には、「五時、宗像久敬氏来邸、原田君の伝言にて重臣云々の話ありたり」とある。宗像はこの日本戸に、この重大時機に際して重臣が天皇に直接拝謁して自由に時事につき進言すべきであるが、木戸がその手続きを取らなければ天皇の判断を曇らせることになること、また世間では天皇・皇室に対する不満の声が始め出ており憂慮すべき事態であるから、木戸は重臣の意見を容れ、重臣の天皇への拝謁を実現し事態を打開すべきであること、を内容とする原田の伝言を伝え、木戸を説得した。その結果ついに木戸は、賀正参内に代わる天機奉伺の形をとることで、各重臣の天皇への意見具申を認めるに至つたのである。

二月七日平沼、九日広田、一四日近衛、一九日若槻、二三日岡田、二六日東条と、各重臣は天皇に意見具申を行った。この時近衛が天皇に対して行った具申が、「敗戦は遺憾ながら最早必ずなりと存候」で始まる有名な近衛上奏文である。ここで近衛

この頃近衛は戦局の急迫に直面して、終戦工作について大磯の吉田茂・池田成彬・原田熊雄（故元老西園寺公望の秘書）らと連絡を取り、岡田啓介・若槻札次郎・平沼騏一郎らの重臣と対策を協議していた。四重臣は一月三日にも終戦工作を協議したが、木戸が重臣を天皇から遮断している以上、その実現は不可能に見えた。そこで一計を案じた原田が選んだのが、自分と日銀で同期の親友で、木戸とも個人的に親しい宗像であつた。宗像は原田の依頼で、頑なな木戸に、重臣の意思を天皇に取り次ぐ機会を作るよう、説得する役目を請け負つたのである。

宗像は、かつて日銀のロンドン代理店監督役であつた際、吉田茂巡閱使らと共に、英国の提案する中国法幣制度確立のための対中経済借款案（リース・ロス幣制改革案）に参加するよう、本国に働きかけた経歴を持つていた。そして日中戦争勃発後、調査局長から上海駐在参事となつた宗像は、第一次近衛内閣の池田参議（その後蔵相兼商工相）の下に、英国等との華中国際通貨共同創出による対中終戦工作を行った。これは、宗像のリース・ロス幣制改革案への協力構想の延長上にあつた。宗像や池田の努力は大きな限界を有しており、結局失敗に終わった。だが、この時に協力しあつた近衛・池田・吉田・原田・宗像らのネットワークの上に、新たに対米英中の終戦工作が模索されたのである。宗像は日銀審査部長を経て占領地の蒙疆銀行総裁に就任したものの、現地陸軍と衝突して日本に帰つてきたばかり

は、米英では敗戦後の国体変革までは考えていないこと、憂慮すべきは敗戦ではなく敗戦に伴う共産革命であることを述べた。そして、軍部内に徹底的な米英撃滅を唱える一方でソ連さらに中共とさえ結ぶべしと主張する者があるが、これらは民間右翼等と結んで終戦工作を阻止し、国内大混乱に乗じて共産革命を達成しようとする者であると論じ、終戦工作の前提として陸軍内部の親ソ・強硬派を肅正すべきであり、そうすれば米英及び蔣政権も態度を軟化させるであろうと述べた。即ち、近衛は陸軍内部の親ソ・強硬派の肅正と、対ソではなく対米英終戦工作による国体護持とを訴え、それらが急を要することを強調したのである。近衛上奏文については、従来、その反共イデオロギーや近衛の戦時共産主義への異常なまでの恐怖心の発露がしばしば取り上げられて来た。しかし近衛上奏文は、米国側の動向等についての比較的確な情報分析に基づいて、対ソ接近と対米英徹底抗戦という陸軍側の主張に取り込まれていると見られる天皇を、対米英直接和平工作及び肅軍へと説得しようとする

東京の上海人

匈奴

古代遊牧国家の興亡
沢田勲著／北ユーラシアに覇を唱え、漢帝國と激しく抗争した騎馬遊牧民族、匈奴の歴史、文化、社会、東方選書31／1545円(税込)

禁祥違著／神崎龍志訳／過酷な現実立ち向かう中国人留学生たちの夢と挫折を描く。中国で話題の日中合作ドラマの原作小説。1854円(税込)

香港ファン待望 携帯便利な決定版辞典 広東語辞典 [ポケット版]

香港・萬里機構出版有限公司十東方書店編
使用頻度の高いことば、広東語独自のことば、新語・新義を中心に掲載。親字2800、見出し8400を収録。日本語音訓索引付／2987円(税込)

東方書店

東京都千代田区神田神保町1-3
☎03-3269-2131 FAX.3269-8655

したものであった。軍部内「共産分子」の陰謀説を除けば、その状況認識は意外に正確で現実的であった。

三月三日再び木戸を訪れた宗像は、木戸の口から意外な言葉に耳にする。それは、近衛上奏文の現実性を裏書きするものでもあった。

- (1) 写真は、宗像巖氏提供。本稿の作成にあたり同氏に様々なご教示を頂いた。
- (2) 宗像と美術との関係や、宗像とシャガール、カンディンスキ、パウル・クレールとの交遊については、水沢勉「わかちあった熱狂」(神奈川県立近代美術館編『年報・一九八三年度』)、宗像巖「非具象絵画」(東京国立近代美術館ニュース『現代の眼』三九二号、一九八七年七月)等を参照。
- (3) 宗像と南原の経歴については、主に宗像巖氏からの聞きとりや、丸山真男他編『聞き書き 南原繁回顧録』(東京大学出版会、一九八九年)二四頁等による。
- (4) 南原の終戦工作については、同右書、二六四―二七七頁等による。
- (5) 木戸幸一『木戸幸一日記 下巻』(東京大学出版会、一九六六年)一一九九・一二〇六・一二〇八―一二二〇頁。
- (6) 同右書、一一六四頁。
- (7) 拙稿「日中戦争収拾構想と華中通貨工作」『国際政治』九七号(一九九一年)及び、拙著『日中戦争期における経済と政治』(東京大学出版会、一九九五年)補論。
- (8) 宗像巖氏所蔵「宗像久敬日記」一九四五年三月三日の項。この複製は、東京大学法学部附属近代日本法政史料センターに所

ブルームズベリの歴史学(Ⅲ)

近藤和彦

社会史学会のポストモダン談義

中世都市ヨークで開かれた社会史学会の大会は、一二世紀のすばらしい大聖堂をホテルの窓外にのぞみながら報告を聞き、食事をとるといふ、泊りこみの贅沢な学会であった。

その初日の全体セッションが「ポストモダンと歴史学」だった。まずは右派の代表(?)としてA・マリックが、「ひとの過去をめぐる知を呈示するにあたって、史料・概念・記号を明晰に精確に使用すること。非形而上学的歴史学の弁明のために」という長い題の報告。ヘイドン・ホワイトをはじめとする歴史哲学者の表象論にたいする批判、というより経験主義史家としての反感の表明である。ついで左派を代表して、かのパトリック・ジョイスが、「社会史から社会的なるものの歴史へ。ポストモダ

蔵されている。

- (9) 矢部貞治『近衛文麿』(読売新聞社、一九七六年)七〇―七〇五頁、木戸日記研究会『木戸幸一関係文書』(東京大学出版会、一九六六年)四九二―五一一頁。
- (10) 庄司潤一郎『近衛上奏文』の再検討『国際政治』一〇九号(一九九五年)。

(まつうら・まさたか 北海道大学法学部助教授・日本政治史)

松浦正孝

日中戦争期における経済と政治

近衛文麿と池田成彬

A5判・二三八頁・六五九二円

吉田 茂賞受賞

木戸日記研究会編

木戸幸一日記

上・下

A5判・平均六八八頁・各七四二六円

木戸日記研究会編

木戸幸一日記

東京裁判期

A5判・五三〇頁・七二〇円

丸山真男・福田歓一編

聞き書 南原繁回顧録

四六判・五五六頁・四三二六円

東京大学出版会

ンについての省察。マリックの身ぶりゆたかな報告中にジョイスは大きなアクビをしてみせたり、ジョイスの逐一の反批判にマリックが乾いた笑いをみせたり、結局二人は、並んで座りながらも文字どおりそばを向いたまま、たがいに嫌味や揶揄をくりかえすだけで、ただけない。三番目に立ったラドミラ・ジョーダノヴァという女性が「文化史はどこへいく」と題して、「ポストモダンとは感情的な好悪や揶揄でかたづけ問題ではなく、知識人のゲームでもない。だれもが真剣に考えなくてはならない問いなのだ」と静かに強調して、拍手をあげた。

二日目の朝食には、やや遅れてホールに出ていった。大きなテーブルの右端の席にいたが、隣の若い女性が黙りこくって食べていて、こりゃいかん、と考えはじめていた折も折、なんだか見たことのある可愛いおばあちゃんきたぞ、と思うまもなく、わが正面にすわって、「わたし、ナタリ・デイヴィスです」。インタヴュー集『歴史家たち』(名古屋大学出版会)の漫画のイメージそのまま、小柄でエネルギーにみちた女性である。プリンストンの歴史学研究所の所長の任期四年を終えて、今年度はオクスフォードのベイリオル学寮に在るのだ(その学寮長はフランス史のコーン・ルーカスで、このたびオクスフォード大学総長に選出された)。初日はパスして昨晩おそく会場に着いたよし。いま印刷中の、一七世紀の三人の女性をめぐる新著『辺境II欄外の女たち』のこと。息子アローンとホリ・コールのジ

己絶対化の傲慢は許されない、相対的な存在として他と並んで共にあり、共に生きるべきことを意味している、のではなからうか。

そして、このことは、何もアメリカ社会についてだけ言われるべきことではない。実は、私たち日本人自身、日本社会自体について言われるべきことでもある。さらに、今や、トランス・ナショナル、クロス・カルチュラル、ボーダーレスになりつつあると言われる地球社会全体についての問題でもあろう。本日は、フルブライト交流計画五〇周年の記念でもあるが、フルブライト上院議員自身、かつて著書『権力のおごり』を刊行したが、フルブライト交流計画も、各国が自国の文化を絶対化せず、他国の文化を謙虚に学び、理解し合うことで、地球上の各人種、民族が共生してゆくことを目的としたものといえよう。

(本稿は、一九九六年六月、アメリカ学会三〇周年およびフルブライト・プログラム五〇周年を記念して、アメリカ歴史家協会会長のリンダ・K・カーバー教授による「アメリカ史における女性」と題する講演と並んで、東京大学本郷キャンパスにおいて行われた同題の公開講演に手を加えたものである。)

(さいとう・まこと 東京大学名誉教授・アメリカ政治外交史)

宗像久敬ともう一つの終戦工作(下)

松浦正孝

一九四五年三月三日に宗像久敬が木戸幸一内大臣を再び訪れたのは、一人で思いつめた木戸が死を覚悟していることを前回の会談の際に感じた宗像が、これ以上木戸に国事を誤らせたくないと考え、またそれとは別に、友人としてその苦悩を慰めようと思ったためであった。

宗像を迎えた木戸は、今や戦局や政治が重大な危機にあると述べ、自分の所には、戦争を始めた人々が、戦争に負けたことのない国はないと弁明しに来る一方、皇道派に勳事を任せよという主張や、二・二六事件のような青年将校による急進的な動きが伝えられて来ていると語った。そして木戸は、問題はソ連がドイツの敗北後にどう出て来るかだと言ひ、ソ連は四月に日ソ中立条約更新拒否を通告し日本に干渉して来るのではないか、という見通しを述べた。木戸にとって、戦争の帰趨を左右するものはソ連であり、米英との直接和平は考慮の対象外にあった。ドイツがあと一ヶ月で降伏したら、ソ連が日本に仲介を申し入れて来て、それを受け容れなければ武力侵攻すると言うので

齊藤眞
アメリカ政治外交史

A5判・二八〇頁・二五七五円

齊藤眞

アメリカ革命史研究

A5判・五二八頁・六七九八円

自由と統合

本間長世

アメリカ史像の探求

A5判・三四六頁・四二二〇円

中野勝郎

アメリカ連邦体制の確立

A5判・三三〇頁・五九七四円

ハミルトンと共和政

長田豊臣

南北戦争と国家

A5判・二八〇頁・四三二六円

本橋正

アメリカ外交史概説

A5判・二八八頁・二八八四円

東京大学出版会

はないか。そうするとソ連はすぐに二、三千の戦闘機を欧州から移動して来るであろう。そうなれば、米軍がサイパンからやって来るどころの話ではない。ソ連は共産主義者の入閣を要求して来る可能性があるが、日本としては条件が不面目でさえなければ、受け容れても良い。米英では日本には親英米派がいるから戦争の早期終結ができると思っっているかも知れないが、マニラや硫黄島の戦闘を見て、本土上陸が容易ならぬことを覚悟して居るであろう。いずれにせよ、陸海軍、特に陸軍が、「もうどうにもならない」と言い出さない限り、戦争はやめられない。こう語って来た木戸は、宗像に、「共産主義ト云ふガ、今日ハソレホド恐ロシイモノテハナイソ、世界中ガ皆共産主義テハナイカ、欧州モ然リ、支那モ然リ、残ルハ米國位ノモノテハナイカ」と言った。驚いた宗像は、共産主義になつたら皇室はどうなるのか、国体と皇室の擁護は国民の念願であり木戸の思いでもあるはずだ、と木戸に問い返し、このままソ連の干渉を待つではなく米国と直接接触すべきことを主張したのである。

帰宅した宗像が、「今日本ガ率直ニ米ト和シ(時期ハ別トシテ)民主主義ヲ容レ皇室及国体ヲ擁護スルヤ、ソビエツト手ヲニキリ共産主義テユクヘキカ之ハ大ナル問題ナリ」と記したように、日本は重大な岐路にあつた。そして、木戸と宗像との間には、終戦及び戦後の日本の行き方をめぐって、明らかに大きな見解の隔たりがあつた。宗像は、終戦に際して英米との直接和平を願ひ、戦後もその紐帯の上に皇室及び国体を護持すべきであると考へ、近衛や吉田、池田らと意見を一にしていた。実は木戸に会う前、宗像は近衛と会い、日中戦争解決に失敗したのも皆軍部強硬派の反対のためで、これは後から考へると共産主義によるものであつた、という述懐(上奏文と共通した認識)を近衛から聞かされていた。「今ノ日本ノ状態カラスレバモウカマワナイ、ロシヤト手ヲ握ルガヨイ、米英ニ降参シテタルモノカト云ふ氣運ガアルノテハナイカ、結局皇軍ハロシヤノ共産主義ト手ヲニキルコト、ナルノテハナイカ」という木戸の話は近衛の説を裏付けるように、宗像には思われたのである。

宗像の印象では、木戸は陸軍内の親ソ・強硬派に籠絡されていた。「要スルニ彼ハ確固タル方針ナク陸軍ノ態度ニヨリソ連接近ナリ」と宗像は後に日記に書き込んでいるが、それは、木戸が対ソ接近を唱へたかと思つと、ソ連の出兵によつては国内が混乱に陥ることを恐れ、動揺していたためである。木戸自身も、戦争の收拾には国内政治の把握が不可欠であるから、結局は実

ける米英とソ連との対日提携を回避しようとした。この方策は従来の軍中央の対ソ戦争準備や、防共・反共の方針とは正反対のものだったため、現地軍に反発と混乱とを引き起こした(3)。八月一九日に最高戦争指導会議が決定した「世界情勢判断及戦争指導大綱」においても、日中戦争解決にソ連を利用すること、対敵宣伝謀略により米英ソ中の離間を目指すこと等が決められ(4)、これに先立って参謀本部が作成したと思われる「今後採ルヘキ戦争指導ノ大綱ニ基ク対外略指導要領案」には、ソ連の仲介によつて日中戦争を終結させる際の条件として、重慶政権の支配地域をソ連の勢力圏とし、日本側占領地域は日ソ勢力の混交地帯とすること、重慶政権がこれに協力しなければ中共を代わりに支援することまでが記されていた(5)。こうした流れの上に、九月二八日の最高戦争指導会議は、対ソ接近とドイツ降伏の際のソ連利用による情勢好転を内容とする「対ソ施策に關する件」を決定した(6)。

反ソ・反共から親ソ・容共へ、戦争方針の一大転換を一貫し

関東大震災 政府陸海軍関係史料

〈全3巻〉

松尾章一監修 國家機関は庶民をいかに管理統制したか、散在する膨大な史料の中から未公開のものを厳選。

I巻 政府・戒厳令関係史料
既刊/本体価格10,000円

II巻 陸軍関係史料
2月刊/本体価格17,000円

III巻 海軍関係史料
2月刊/本体価格6,000円
*呈目録

大学とアジア太平洋戦争

戦争史研究と体験の歴史化

白井厚編 戦争体験の歴史化、国際化を唱へる編者のよびかけに、外国人、体験者をも混えた共同研究、協同作業の成果。戦争とアカデミズムの相克、戦時下各国の大学はどのようなものであつたか。 定価5974円

過渡期の世界

近代社会成立の諸相

鈴木信雄・川名登・池田宏樹編 欧米や日本の近代社会の成立の諸相を時代の転換期について多面的に考察。未来を真摯に探究している人々に考えるヒントを提供。 定価7004円

欧州通貨統合の政治経済学

島崎久彌 1980年代半ば以降の展開—マルクの台頭、マーストリヒト条約、ドイツ経済統一等—を明らかにするとともに、金融統合にも言及し、今後を展望する。 定価7931円

台湾・韓国の地方財政

川瀬光義 民主化の進む両国の動向は欧米を主な対象としてきた地方財政の国際比較においてアジアをも視野におくことを迫っている。両国の特質を日本との比較において解明。 定価3296円

過疎地域の景観と集団

長谷川昭彦・藤沢和・竹本田持・荒穂豊 地域の集団活動の再興と景観形成をかわらせて、地域の振興・活性化の将来的方策を考える。 定価5974円

日本経済評論社

東京都千代田区神田神保町3-2-233230-1661

権を握る陸軍の意向に従うしかない、と宗像に語っていた。

実は、陸軍ですでに「対ソ・シフト」を敷いているのではないか。木戸との会談を終えた宗像には、思い当たる節があつた。自分が四四年一二月、陸軍省軍務局に旧知の大西一軍務課高級課員を訪ねた際に大西が不在だったのは、海軍軍令部と陸軍省軍務局とで満ソ国境調査に名を借りてソ連の態度を打診しに行つたのではないか。四一年の松岡外相の独ソ訪問に随行した永井八津次大佐(四五年三月から少将)が四五年二月に軍務課長に就任したのも、対ソ提携の準備のためではないか(1)。

宗像の推測は、必ずしも外れなものではなかった。即ち、参謀本部では、四三年四月に参謀次長に就任したソ連通の秦彦三郎中将の下で、対ソ関係改善が本格的に推進されていた。すでに四三年九月御前会議決定「今後採ルヘキ戦争指導大綱」において、中立国ソ連に関しては参戦防止と国交調整、独ソ和平斡旋を目標とすることが定められていたが、四四年三月には北樺太石油・石炭利権のソ連への譲渡が実現され、日ソ漁業条約が延長される等対ソ接近策が進められた(2)。さらに、四四年八月一〇日付で軍中央から各現地軍に対して指示された「対延安政権宣伝謀略実施要領」では、爾後中国共産党を独立地方政権としての「延安政権」と呼び、できるだけ「反共」等の名称を使わないこととして、ソ連及び中国共産党との妥協を図り、米英と結ぶ蔣介石の重慶政権と中共政権とを切り離し、中国にお

て推進したのは、種村佐孝中佐(四四年三月より大佐)ら参謀本部の戦争指導班であつた。種村は四四年二月より二ヶ月間、秦参謀次長から突如ソ連出張を命ぜられ、視察を終えて帰国した後、四月四日に木戸を訪れてソ連情勢を大いに説いた(3)。この日の木戸の日記には、「十時半、種村佐孝大佐来庁、武官長と共に最近の蘇聯の実情を聴く。大に獲る所ありたり」と記されており、木戸が種村の対ソ接近策に影響されていることが窺われる。木戸が宗像に語つた共産主義観は、このとき木戸の脳裏に刻み込まれたものだったかも知れない。

陸軍側の政策転換の背景には、米英とソ連とが可分であるという前提があり、事実陸軍には、戦後の米ソ対立が必至であることを根拠として、そうした観測を支える情報が多く集められていた(4)。さらにその背後には、陸軍側の、今さら米英に直接降参するわけにはいかないという面子と、ドイツ敗戦と共に強大なソ連の軍勢力が全て日本に集中されて来ることへの恐怖とが、強くあつた。永井軍務課長や種村大佐ら陸軍中堅層の対ソ

接近策は、あくまでもソ連の参戦防止を限度とした「対英米戦完遂の為の対ソ施策」であつて、それが「終戦方策としての対ソ交渉」に転化することを否定していたという。特に永井は近衛の上奏と同じ頃、重臣間に対ソ交渉を通じての対米交渉論があるのではないかと強く警戒した。陸軍中堅層の対ソ接近論は、ソ連を通じて少しでも有利な条件を引き出そうとする和平案を容認する陸軍上層部とは異なり、対米英戦貫徹・本土決戦と不可分の関係にあつた(9)のである。四五年四月になってソ連軍のシベリア移動が伝えられ、ソ連の対日戦準備が明らかになると、陸海軍上層部はソ連の対日参戦防止を政府に要求し、外務省はこれを利用してソ連を仲介とする終戦工作を進めた。しかし、こうした動きに種村ら参謀本部の中堅将校らは反発し、終戦工作を進める近衛らに本土決戦を強く迫るようになる(10)。

なお、近衛が、対ソ和平工作がソ連による共産主義者(野坂参三ら)の入閣要求等を招く危険を察知しており、その排撃のために上奏文を作成したことは、すでに先行研究が指摘している(11)。しかし、天皇側近の木戸までが天皇制と共産主義とを両立させ得ると考え(戦後の野坂による民主戦線論に連なる考え方と言えよう)、これを容認していたという宗像の証言は、近衛上奏文にある共産革命への戦慄がいかに現実性を帯びていたかを裏書きするものであつた。なお、対米英直接和平を指向していた近衛らの根拠は、グルー元駐日大使ら米国の親日派外交官

(12)が天皇制維持を保証してくれることへの期待であつた。南原らの意見具申も、近衛らの期待を支えたと思われる。近衛らは、対ソ提携下での終戦に伴う共産主義革命を回避しようとし、米國との直接的和解によって、米國流の「民主主義」と国體護持とを両立させることができると考えたのである。

しかし、近衛ら重臣から遮断され陸軍や木戸の意見に影響されていた天皇は、米英に対する強烈な反発を示す陸軍への顧慮もあつて、「一撃後の和平」やソ連を通じての和平を選んだ。近衛上奏文を聞き終えた天皇は、米國は国體変革を考えているという軍部の観測は誤りか、と近衛に質し、自分は戦果を挙げてからでないと終戦は困難だと思ふ、と述べた(13)のである。戦争終結に反対する種村ら参謀本部戦争指導班が六月八日、戦争完遂を高唱する「今後採るべき戦争指導の基本大綱」を御前會議決定に持ち込むと、先述したように終戦を焦慮する木戸は天皇に「時局收拾対策試案」を上奏し、天皇と共に対米英直接ではなくソ連を仲介とする和平工作を強力に推進し始めた(14)。

天皇と木戸がついに対米英直接和平へと動いたのは、広島への原爆投下とソ連参戦とを知つてからであつた。しかしその決断は、ソ連仲介の和平という選択肢の消滅や、国家や国民の被害の甚大の故にのみなされたわけではない。近衛や宗像らと、南原らの、対米英直接和平によつて天皇制護持が可能になるといふ説得や情報提供があつたことも、決断を支えたと思われる。

大学卒業後年月を経て再会した宗像久敬と南原繁。恐らく、再会の二年前に公刊されていた木戸の日記に、お互いの名前を見出していたことであろう。しかし、二人の同級生がこの時どんな言葉を交わしたのか、写真からは窺い知ることができない。

- (1) 「宗像久敬日記」、前掲、一九四五年三月三日の項。
- (2) 外務省「日本外交年表並主要文書(下)」(原書房、一九六五年)五八八―五八九・五九五―六〇一頁。
- (3) 伊藤隆他編「続現代史資料4 陸軍 畑俊六日記」(みすず書房、一九八三年)一九四四年八月二日の項。
- (4) 外務省、前掲書、六〇一―六〇四頁。
- (5) 参謀本部所蔵「敗戦の記録」(原書房、一九六七年)三四―三八頁。なお、波多野澄雄「太平洋戦争とアジア外交」(東京大学出版会、一九九六年)第一〇章も参照。
- (6) 外務省、前掲書、六〇六頁。
- (7) 種村佐孝「大本營機密日誌」(ダイヤモンド社、一九五二年)一五八―一六五頁・一七三―一八八頁。
- (8) 例えば、伊藤隆他編、前掲書、一九四四年一月三日・一月八日・一九四五年二月三日の項等を参照。

Harper's Bible Commentary

ハーパー聖書注解

J.L.メイズ編 聖書文学学会執筆

絶賛発売中

旧約聖書・新約聖書、最も広い範囲の旧約聖書外典、合計12巻の解説と注解を一冊に収録した、画期的な聖書注解。最新の研究と方法に基づき、専門知識を前提とせず、分かりやすく解説します。

全11巻

全11巻 1980円

全11巻 1980円

内村鑑三 鈴木範久 再臨運動

好評既刊

娘の死を乗り越え、第一次世界大戦を経験した内村鑑三は再臨運動を唱える。人類の罪を深く認識し唱えた再臨運動の本質を追求。

◆2冊不敬事件(上) 1,136円 ◆3冊不敬事件(下) 1,136円 ◆4冊後世へ残すもの 1,175円 ◆5冊ジャーナリスト時代 3,090円 ◆6冊天に生きる 3,090円 ◆7冊平和の道 1,399円 ◆8冊木を植えよ 3,605円 ◆9冊現世と来世 3,194円

教文館

〒104 東京都中央区銀座4-5-1 電話03-3561-5549